

日蓮大聖人御書全集

なかつかさのさえもんじょうどのごへんじ

中務左衛門尉殿御返事

新版
1602
〜
1603

なかつかさのさえものじょうどのごへんじ

中務左衛門尉殿御返事

こうあんがんねん

がつ ちち

さい しじょうきんご

弘安元年('78) 6月26日 57歳 四条金吾

そ ひと にびょう いち み やまい じだい

夫れ、人に二病あり。一には身の病。いわゆる、地大

ひやくいち すいだいひやくいち かだいひやくいち ふうだいひやくいち いじょうしひやくしびょう

百一・水大百一・火大百一・風大百一、已上四百四病。

やまい ちすい るすい ぎば へんじやくとう ほうやく

この病は治水・流水・耆婆・扁鵲等の方薬をもつてこれを

じ に こころ やまい さんどくないしはちまんしせん やまい

治す。一には心の病。いわゆる二毒乃至八万四千の病な

ほとけ にてんさんせん じ

り。仏にあらざれば二天三仙も治しがたし。いかにいわん

しんのう こうてい ちからおよ

や、神農・黄帝の力及ぶべしや。

こころ やまい じゅうじゅう せんじんわ ろくどう ほんぶ

また心の病に重々の浅深分かれたり。六道の凡夫の

さんどく

はちまんしせん

こころ

やまい

しょうじょう

さんぞう

くしや

三毒・八万四千の心の病をば、小乗の三蔵・俱舎・

じょうじつ

りっしゅう

ほとけ

じ

だいじょう

げこん

ほんにや

だいにちきよう

成実・律宗の仏これを治す。大乘の華嚴・般若・大日経

とう きょうぎよう

謗

お

さんどくはちまん

やまい

しょうじょう

等の経々をそしりて起こる三毒八万の病をば、小乗を

じ

ぞうちょう

へいゆまつた

もつてこれを治すれば、かえりては増長すれども平愈全

だいじょう

じ

しよだいじょうきよう

くなし。大乘をもつてこれを治すべし。また諸大乘経の

ぎょうじや

ほけきよう

そむ

お

さんどくはちまん

やまい

げこん

行者の法華経を背いて起こる三毒八万の病をば、華嚴・

ほんにや

だいにちきよう

しんごん

さんろんとう

じ

般若・大日経・真言・三論等をもつてこれを治すれば、い

ぞうちょう

たと

ぼくせきとう

い

ひ

みず

よいよ増長す。譬えば、木石等より出でたる火は、水をも

け

みず

お

ひ

みず

掛

つて消しやすし。水より起こる火は、水をかくればいよい

よ熾盛しじように炎上えんじようし高くあがる。たか

いま にほんこく こそ ことし えきびよう

しひやくしびよう

今の日本国、去・今年の疫病は、四百四病にあらざれ

かだ へんじやく じ およ

しょうじよう

ごんだいじよう

はちまんしせん

ば、華佗・扁鵲が治も及ばず。小乗・権大乘の八万四千

やまい

しよしゆう

ひとびと

祈

かな

の病にもあらざれば、諸宗の人々のいのりも叶わず、か

ぞうちよう

ことし

止

ねんねん

や

えりて増長するか。たとい今年はとどまるとも、年々に止

さいご だいじしゆつたい

のち

さだ

みがたからんか。いかにも、最後に大事出来して後ぞ、定

そうち

まることも候わんずらん。

ほけきよう

い

しゆ

ほう

じゆん

やまい

じ

法華経に云わく「もし医道を修して、方に順じて病を治

ほか

やまい

ま

し

いた

せば、さらに他の疾を増し、あるいはまた死を致さん。し

ぞうぎやく

ねはんぎよう

い

とき

おうしゃだいじよう

かもまた増劇せん」。涅槃経に云わく「その時に王舎大城の

あじやせおう

へんたい

かさ

しよう

ないし

きず

こころ

阿闍世王○遍体に瘡を生ず乃至かくのごとき創は心に

したが

しよう

しだい

お

しゆじよう

よ

従つて生ず。四大より起こるにはあらず。もし衆生に能

じ

ものあ

い

ころわりあ

うんぬん

く治する者有りと云わば、この処有ることなけん」云々。

みようらくい

ちじん

き

し

じゃ

みずか

じゃ

し

うんぬん

妙楽云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」云々。

えきびよう

あじやせおう

かさ

か

ほとけ

じ

この疫病は阿闍世王の瘡のごとし。彼は仏にあらずんば治

がた

こ

ほつけ

のぞ

がた

し難し、此は法華にあらずんば除き難し。

にちれんくだりばら

こぞじゆうにがつさんじゆうにちことお

ことし

はたまた、日蓮下痢、去年十二月三十日事起こり、今年

ろくがつみつかよっか

ひび

ど

増

つきづき

ばいぞう

じようごう

六月三日四日、日々に度をまし、月々に倍増す。定業かと

ぞん きへん ろうやく ふく このかた ひびつきづき

存ずるところに、貴辺の良薬を服してより已来、日々月々に

げん いま ひやくぶん いち 知 きようしゆしやくそん い

減じて、今、百分の一となれり。しらず、教主釈尊の入

替 にちれん たす たも じゆ ぼさつ

りかわりまいらせて日蓮を扶け給うか。地涌の菩薩の

みようほうれんげきよう ろうやく 授 たま うたが そうろう

妙法蓮華経の良薬をささずけ給えるかと疑い候なり。く

ちくごぼうもう そうろう

わしくは筑後房申すべく候。

お もう こんげつにじゆうごにちいぬのとききた

また追つて申す。きくせんは今月二十五日戌時来つて

そうろう しゆじゆ もの 数 尽 富木 殿 帷

候。種々の物、かずえつくしがたし。ときどののかたびら

もう たま

の申し給わるべし。

にようぼう おん 祖 父 おんこと 歎 い そうろう 由 もう

また女房の御おおじの御事、なげき入つて候よし、申

たま そらら きようきようきんげん
させ給い候え。恐々謹言。

ろくがつにじゅうろくにち

六月二十六日

なかつかさのさえものじようどのごへんじ

中務左衛門尉殿御返事

にちれん
日蓮

かおう
花押